

〈参考〉馬こかしの石垣・三枝の石垣について

鞠智城跡の外郭線上には、「馬こかしの石垣」と「三枝の石垣」という二つの石塁が所在する。昭和42年度の第1次調査時に測量調査が実施された際、一部に矢穴の痕跡が確認され、同時代の遺構としては認識されないまま現在に至っている。

今回、池ノ尾において石塁が検出されたことから、再調査による見直しを図ることが今後の課題といえる。

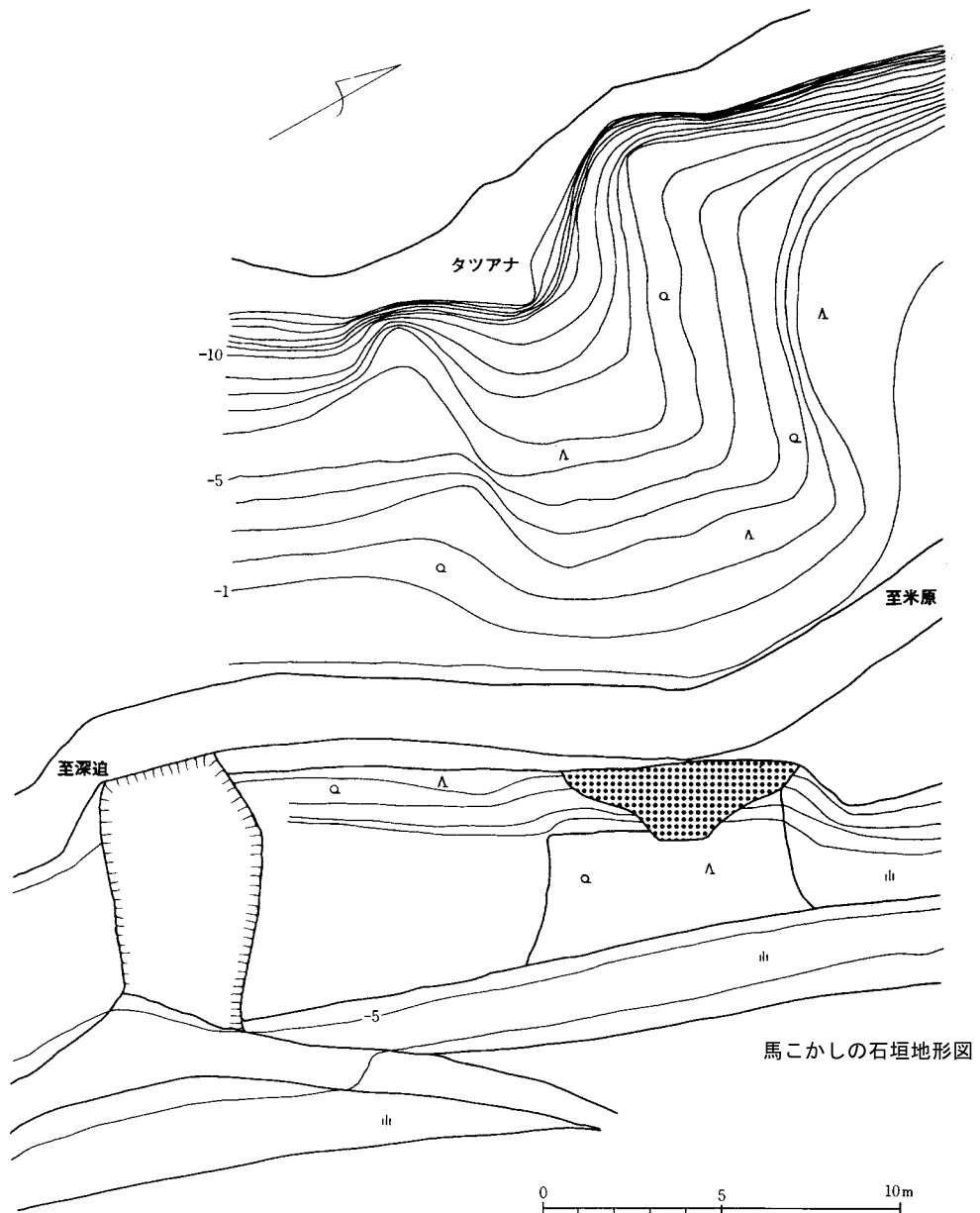
ここでは、「馬こかしの石垣」、「三枝の石垣」の所見について、熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』から再掲する。

馬こかしの石垣

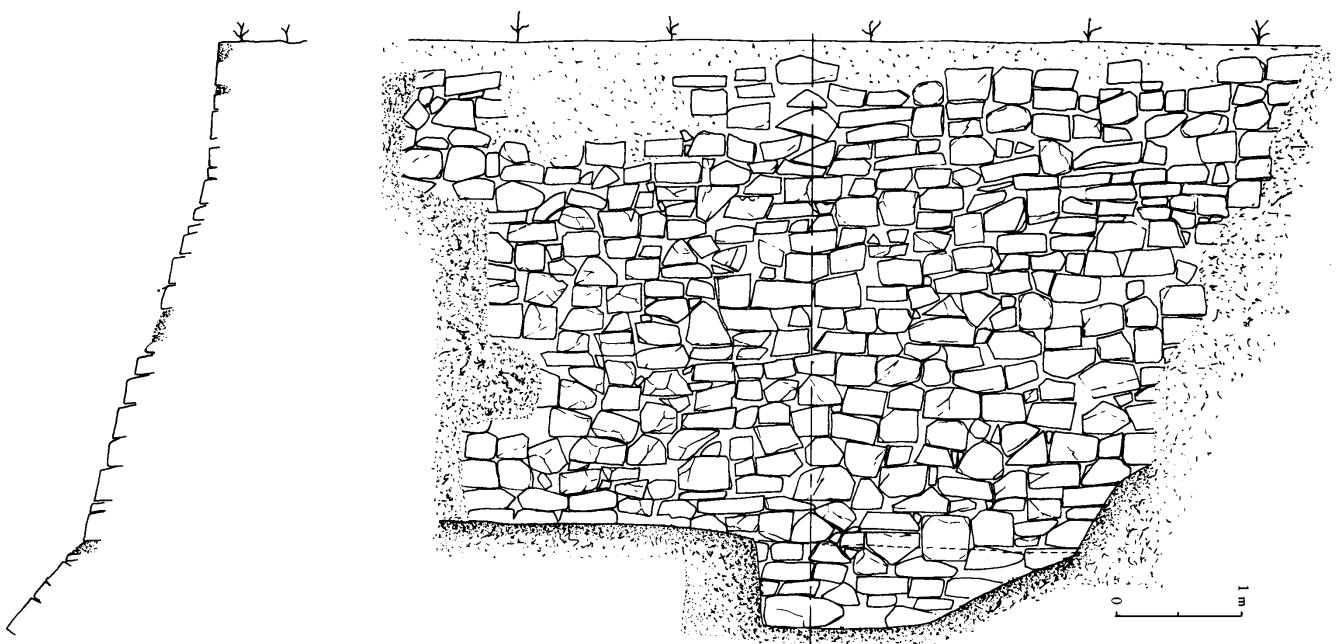
「深迫門礎から米原に進む場合どうしても通らねばならない通路がこの「馬こかし」である。この地点は通路が急にせまくなり要衝の地といえる。現在東側は水田が湾入し、西側は軟弱な凝灰岩を鋭くえぐった自然の崖になっている。この馬こかしの通路は坂本経堯氏の記憶によると、昭和初年には非常にせまくて丸太棒を渡してあり、現存する東側の石塁については草木が繁っていてよく分からなかったとのことである。しかし地元の老人の話では石塁を築いた記憶もなければ、祖先が築いたという言い伝えも残っていない。したがって石塁の築造時期は分からないにしてもかなり古い築造であることがいえる。

さて石塁は先述のとおりこの通路の東側にのみ認められる。その規模は長さ約6.6m、高さは約4.3mまで確認できる。傾斜は断面図（第25図）に示すように非常に急勾配で、上から約2mまではややそり気味であるが、その下約3.8mまでは幾分ふくらみをもち、それ以下は根固め状に裾を広げている。石材はほとんど凝灰岩を加工して使用し、一部に安山岩質のものを認める。石塁の築造状態は、ほぼ長さ30～60cm、厚さ10～30cmの切石をほとんど水平に積みあげ、すき間には小形の石をつめこんでいる。なお石塁の奥行きについてはその深さ、形状ともに不明である（第25図）。

石塁の裏に当たる西側の崖は目のくらむような急傾斜で、水平距離にしておよそ10



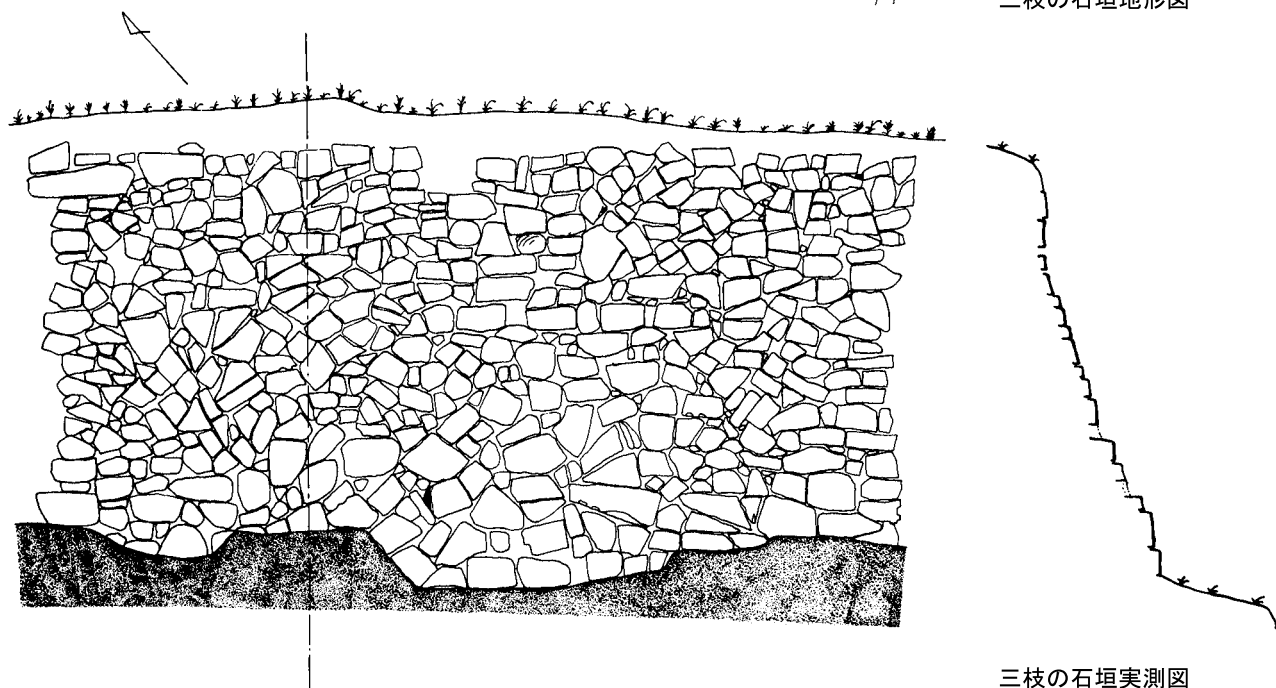
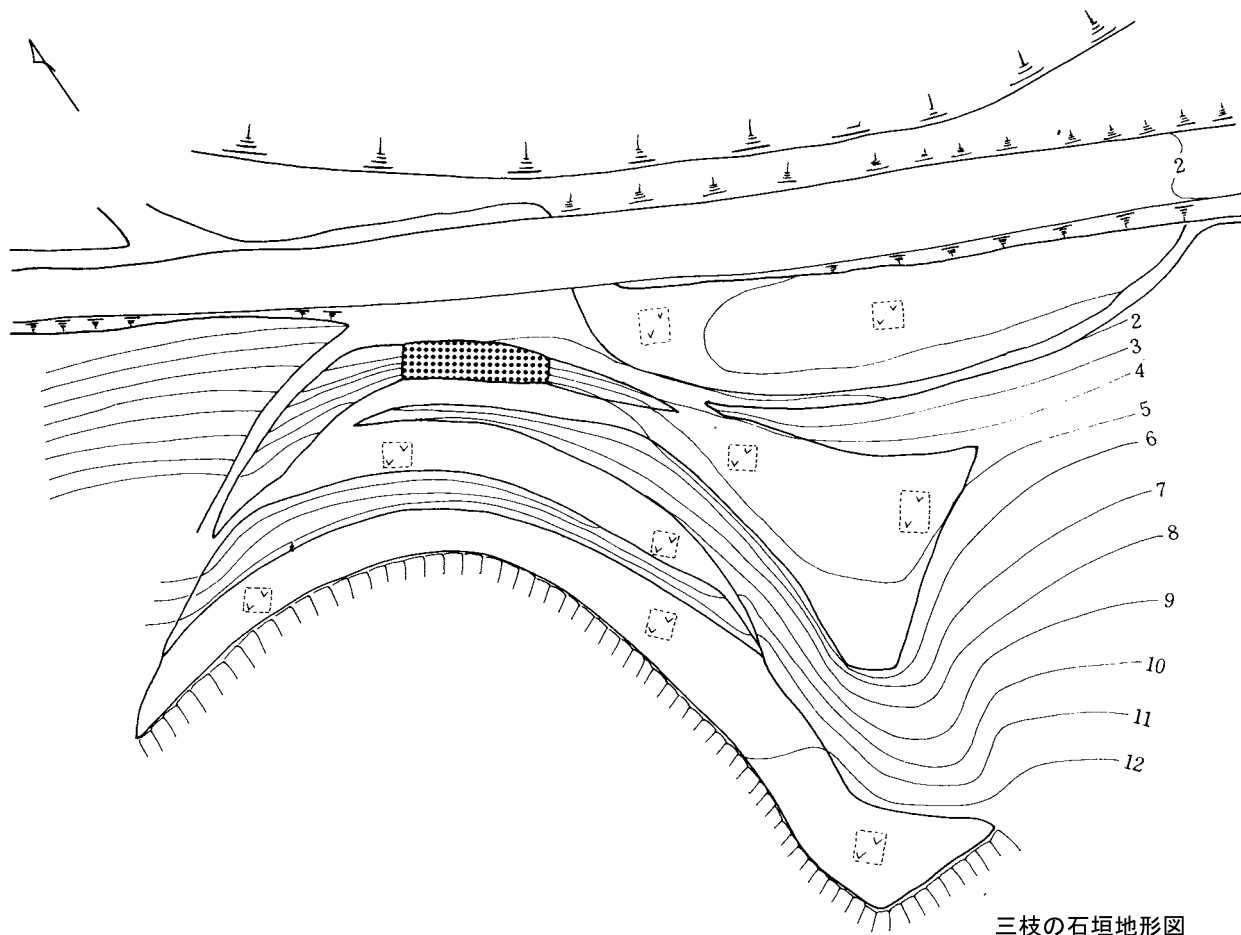
馬こかしの石垣地形図



馬こかしの石垣実測図

第 25 図 馬こかしの石垣（熊本県教育委員会編 1983）

mで12 mの落差があり、さらにそこからはほとんど切り立ったようになっていて、道路面との比高16.5 mを計る。崖の最深部は俗に「タツアナ」と呼ばれており、降雨の



第 26 図 三枝の石垣（熊本県教育委員会編 1983）

ときは流路となる。タツアナから上を見上げると、凝灰岩の浸蝕崖がちょうど屏風のようになり立ち、その間からわずかに空が見えるといった感じである。」

三枝の石垣

「三枝石垣は米原・一寸榎方面をむすぶ道路筋に在る。米原台地の南側北崖にそって道路は連なる。石垣付近の地形（第26図）は、東西に走る道路の南、北側がかなり急な崖線をなす。

石垣は道路の南面に位置する、道路をはさんだ北側崖には石垣は認められない。しかし、崖の基部に数段にわたって石垣を築いている。

石垣についてのべる（第26図）とその長さは約8.30 m。高さ約4.30 m。中央部の傾斜は約75度を有する。石垣は15～20段形成されている。石材はほとんど凝灰岩で大きさは約50cm×70cmの切石を用いている。

石垣上部の二段は下部の築造と異なり石材は同質であるが、切石を用いて上面を水平に保ち、全体に安定感がある。とにかくこの部分は後世補強したものであろうか。最下部の石垣の築造にあたっては比較的大きな切石を用いて赤土層にくいこませている。

石垣の築造にあたっては空隙の充填に意がそそがれ、切石間の間隙には不定形ではあるが、断面の平らな石材で補強している。

全体的に築造に当っては、下石は左斜めにおかれ、上石は右斜されている。上石が右に落ちようとする力を下石の支点が左側におかれている。このような「組み方」は一般に「右きき」の人の手法に多いという。石組みの一部に矢を打ちこんだ痕とみられるものも認められた。石垣を中心とする附近から遺物の発見はなかった。」